

寺田寅彦

物売りの声



物売りの声

毎朝床の中でうとうとしながら聞く豆腐屋のラツパの音がこのごろ少し様子が変わったようである。もとは、

「ポーピーポー」というふうには、中に一つ長三度くらい高い音をはさんで、それがどうかすると「起きろ、オーキーロー」と聞こえたものであるが、近ごろは単に「プー、プー、プー」というふうには、ただひと色の音の系列になっちゃった。豆腐屋が変わったのか笛が変わったのかどちらだかわからない。

昔は「トーフイ」と呼び歩いた、あの呼び声があった
いいつごろから聞かれなくなつたかどうも思い出せな
い。すべての「ほろび行くもの」と同じように、いつな
くなつたともわからないようにいつのまにかなくなり忘
れられ、そうして、なくなり忘れられたことを思い出す
人さえも少なくなりなくなつて行くのである。

納豆屋の「ナツトナツト、ナツト、なないろとうがらし七色唐辛子」と
いう声もこのかいわい界限では近ごろさっぱり聞かれなくなつ
た。そのかわりに台所へのそのそ黙ってはいって来て全
く散文的に売りつけることになつたようである。

「豆やふきまめー」も振鈴の音ばかりになった。このごろはその鈴の音もめったに聞かれないようである。ひところはやった玄米パン売りの、メガフォーンを通して妙にぼやけた、聞くだけで咽喉のどの詰まるような、食欲を吹き飛ばすようなあのバナールな呼び声も、これは幸いにさっぱり聞かなくなってしまった。

つい二三年前までは毎年初夏になるとあの感傷的な苗売りの声を聞いたような気がする。「ナスービノーナエヤーア、キュウリノーナエヤ、トオーガン、トオーナス、トオーモローコシノーナエ」という、長くゆるやかに引

き延ばしたアダジオの節回しを聞いていると、眠いよう
なうら悲しいようなやるせないような、しかしまた日
本の初夏の自然に特有なあらゆる美しさの夢の世界を眼
前に浮かばせるような気のするものであった。

これで対照されていていいと思うものは冬の霜夜の辻占つじうら売
りの声であった。明治三十五年ごろ病氣になった妻を国
へ帰してひとりで本郷五丁目の下宿の二階に暮らしてい
たころ、ほとんど毎夜のように窓の下の路地を通る「花
のたより、恋のつじーうら」という妙に澄み切った美し
く物さびしい呼び声を聞いた。その声が寒い星空に突き

抜けるような気がした。声の主は年の行かない女の子らしかつた。その通る時刻と前後して隣の下宿の門の開く鈴音がして、やがて窓の下から自分呼びかける同郷の悪友TとMの声がしたものである。悪友と言っても藪やぶ蕎麦そばへ誘うだけの悪友であった。「あいつ、このごろ弱っているから引っぱり出して元気をつけてやれ」と言つて引っぱり出してくれる悪友であったのである。

「あんま上下かみしも二百文」という呼び声も古い昔になくなつたらしいが、あのキリギリスの声のようにしやがれた笛の音だけは今でもおりおりは聞かれる。洋服に靴をは

いた姿で、昔ながらの笛を吹いて近所の路地を流して通るのに出会ったのは、つい数日前のことであつた。

盛夏の朝早く「ええ朝顔やあさがお」と呼び歩くのは去年も聞いた。買ってくれそうな家の付近では繰り返し往復して、それでも買わないとあきらめて行ってしまったのは昔のことで、今ではやはり裏木戸から台所へはいって来て、主人や主婦を呼び出すのが多いようである。

「ええ鯉こいや鯉こい」
「ええ竿竹さおだけや竿竹さおだけ」
というのも数年以来聞かないようである。「ええ竿竹さおだけや竿竹さおだけ」
というのをひと月ほど前に聞いたのは珍しかった。

こういうふうには、旋律的な物売りの呼び声が次第になくなり、その呼び声の呼び起こす旧日本の夢幻的な情調もだんだんに消えうせて行くのは日本全国共通の現象らしい。

郷里で昔聞き慣れた物売りの声も今ではもう大概なくなっただけだが、考えてみるとずいぶんいろいろのものがあつた。その中には子供の時分の親しい思い出に密接に結びついて忘られないものもかなり多数にある。

夏になると徳島からやって来た千金丹売りの呼び声もその一つである。渡り鳥のように四国の脊梁山脈を越

せんきんたん

せきりようさんみやく

えて南海の町々村々をおとずれて来る一隊の青年行商人は、みんな白がすりの着物の尻を端折った脚絆草鞋きやはんわらじばきのかいがいしい姿をしていた。明治初期を代表するような白シャツを着込んで、頭髪は多くは黙阿弥もくあみ式にきれいに分けて帽子はかぶらず、そのかわりに白張りの蝙蝠傘こうもりがさをさしていた。その傘に大きく、たしか赤字で千金丹と書いてあったような気がする。小さな、今で言えばスーツケースのような格好をした黒塗りの革靴かわかばんに、これも赤く大きく千金丹と書いたのをさげていたと思う。せんだんの花のこぼれる南国の真夏の炎天の下を、こうした、

当時の人の目にはスマートな姿でゆっくり練り歩きながら、声をテノルに張り上げて歌う文句はおおよそ次のようなものであった、「エーエ、ホンケーワーア、サンシユーノーオー、コトヒーラーアヨ。(休)。マツシーマア、カデンーノーオー、センキーンーンタン」というふうに全く同じ四拍子アンダンテの旋律を繰り返しながら、だんだんに薬の効能書きを歌って行くのである。「そのまた薬の効能は、せんき疝氣せんしやくむねつか疝癪胸痞え」までは覚えているがその先は忘れてしまった。

子供らはこの薬売りの人間を「ホンケ」と呼んでいた。

「ホンケが来たホンケが来た」と言っ
て駆け出して行つては、この「ホンケ」
を取り巻いて、そうして口々に「ホ
ンケ、オーセ、オーセ」と言っ
てねだつた。「オーセ」
は「ちようだい」という意味であるが、
ここの「ホンケ」はこの薬売り自身を
さすのではなくて、薬売りの配つて
歩く広告のビラ紙のことである。この
人間の「本家」がまき歩くビラの「
ホンケ」は、鼻紙を八つ切りにしたの
に粗末な木版で赤く印刷したものであ
つたが、その木版の絵がやはり蝙蝠傘を
さして尻端折しりはしおつた薬売りの「ホン
ケ」の姿を写したものであつた。いっ
しよに印刷してあ

った文字などは思い出せない。子供らにとってはこのビラ紙も「ホンケ」であり、それをくれる人間も「ホンケ」であつたわけである。とにかく、このビラ紙をもらうのが当時のわれわれ子供には相当な喜びであつた。今になつて考えると実に不思議である。少年雑誌やおとぎ話の本などというもののまだ一つもなかつた時代では、こんな粗末な刷り物でも子供には珍しかったのである。ずいぶん俗悪な木版刷りではあつたが、しかし現代の子供の絵本のあくどい色刷りなどに比較して考えるとむしろ一種稚拙にひなびた風趣のあるものであつたようにも思

われる。

同じく昔の郷里の夏の情趣と結びついている思い出の売り声の中でも枇杷びわ葉湯ようとう売りのそれなどは、今ではもう忘れている人よりも知らぬ人が多いであろう。朱漆で塗った地に黒漆でからすの絵を描いたその下にからすまる烏丸枇杷葉湯と書いた一対の細長い箱を振り分けに肩にかついで「ホンケー、カラスマル、ビワヨーオートー」と終わりの「ヨートー」を長く清らかに引いて、呼び歩いていたようにも思うし、また木陰などに荷をおろして往来の人に呼びかけていたようにも思う。その声が妙に涼しいよ

うでもあり、また暑いようでもあった。しかしその枇杷びわ葉湯ようとうがいったいどんなものだか、味わったことはもちろん見たこともなかった。そのころもうすでに大衆性ポピュラリティを失ってしまった、ただわずかに過去の惰性のなごりをとどめていたのではないかと思われる。東京で震災前までは深川へんで見かけたことのあるあの定齋屋じよさいやと同じようなものであったらしいが、しかし枇杷葉湯のあの朱塗りしゆぬりの荷箱とすがすがしい呼び声には、あのガツチンガツチンの定齋屋よりもはるかに多くの過去の夢と市井の詩とを包有していたような気がする。

生菓子をいろいろ、四角で扁平へんぺいな漆塗りの箱に入れたのを肩にかけて、「カエチヨウ、カエチヨウ」と呼び歩くのは、多くは男の子で、そうして大概きまつて尻の切れた冷飯草履ひやめしぞうりをはいていたような気がする。それが持つて来る菓子の中に「イガモチ」というのがあった。道明寺どうみょうじの餡入り餅あんいもちであったがその外側に糯米もちごめのふかした粒がぼつぽつと並べて植え付けてあった。ちようど栗のいがのようだと言うので「いが餅」と名づけたものらしい。「カエチヨウ」の意味は自分にはわからない。このはかない行商の一人に頭蓋骨の異常に大きな福助のような子がい

た。だれかが試みに一錢銅貨と天保錢てんぽうせんを出して、どちらでもいいほうを取れと言ったらはつきりと天保錢を選んだといううわさがあった。また、その生きている頭蓋骨をとつくにどこかの病院に百円とかで売ってあるのだという話もあった。

七味唐辛子しちみとうがらしを売り歩く男で、頭には高くとがった円錐えんすい形の帽子をかぶり、身にはまっかな唐人服をまとい、そうしてほとんど等身大の唐辛子の形をした張り抜きをひもで肩につるして小わきにかかえ、そうして「トーン、トーン、トンガラシノコー（休）、ヒリヒリカライノ

ガ、サンシヨノコー（休）、ゴマノコケシノコ、シヨウ
ガノコー（休）、トーントーンガラシノコ」と四拍
子の簡単な旋律を少しぼやけた中空なバリトンで歌い歩
くのがいた。その大きなまっかな張り抜きとうがらしの唐辛子の横
腹のふたをあけると中に七味しちみ唐辛子の倉庫があつたので
ある。この異風な物売りはあるいは明治以後の産物であ
つたかもしれぬ。

「お銀ぎんが作った大ももは」と呼び歩くやまもも楊梅売りのこと
は、前に書いたことがあるから略する。

しじみ売りは「スズメガイホー」と呼び歩いた。
牡蠣かき

売りは昔は「カキヤゴ」と言つたものらしい、というのは自分らの子供時代におとなからしばしば聞かされたためきの怪談のさまざまの中に、この動物が夜中に牡蠣売りに化けて「カキヤゴカキヤゴ」と呼び歩くというものがあつて、われわれはよく夜道を歩きながらそのたぬきのまねをするつもりで「カキヤゴ」「カキヤゴ」と叫び歩き、そうして自分で自分の声におびえることによつて不思議な神秘の感覚を味わい享樂したものであつた。

北の山奥から時々姿を現わして奇妙な物を売りありく

老人がいた。少しびっこで恐ろしく背の高いやせこけた老翁であつたが、破れ手ぬぐいで頬ほおかぶりをした下からうすぎたない白髪がはみ出していたようである。着物は完全な襦ほろ袢ぼろでそれに荒繩あらなわの帯を締めていたような気がする。大きい炭取りくらいの大きさの竹かごを棒切れの先に引っかけたのを肩にかついで、跛びつこを引歩きながら「丸葉柳まるばやなぎは、山オコゼやまは」と、少し舌のもつれるような低音バスで尻下しりさがりのアクセントで呼びありくのであつた。舌がもつれるので「山オコゼは」が「ヤバオゴゼバ」とも聞こえるような気がした。とにかく、この山男の身辺

にはなんとなく一種神秘の雰囲気が揺曳ようえいしているように思われて、当時の悪太郎どもも容易には接近し得なかつたようである。自分もこの老いさらぼえた山人に何とはなしに畏怖いふの念をいだいていたが、しかしその「山オコゼ」というのがどんなものだか知りたいたいという強い好奇心を長い間もちつづけていた。それでとうとう母にねだって二つ三つの標本を買ってもらった。それは、煙管貝きせるがいのような格好で全体灰色をした一種の巻き貝であつて、長さはせいぜい五六分ぶぐらいであつたかと思う。もちろん貝がらだけでなく生きてきた貝で、箱の中へ草といっしょ

に入れてやるとその草の葉末をみのむし蓑虫かなんぞのよう
のろろはい歩いた。海でなくて奥山にこんな貝が
いるというのがいかに不思議に思われたが、その貝の棲息状せいそく
態などについてはだれも話してくれる人はなかつた。海
の「オコゼ」は魚であるのになぜ山の「オコゼ」が貝で
あるかも不可解であつた。

「山オコゼ」がどうして売り物になるか、またそれを買
った人がどういう目的にそれを使用するか、という疑問
に対して聞き得たことを今ではぼんやりしか覚えていな
い。なんでも今日のいわゆる「マスコット」の役目をつ

とめるといっているのであったようである。たとえばこれを懐中しているとランプでもその他の賭博とぼくでも必勝を期することができるといっているのであったらしい。もちろんこの効験は偶然の方則に支配されるのである。

「丸葉柳まるはやなぎ」のほうはどんな物だか、何に使うのか、それについては自分の記憶も知識も全然空白である。

売り声の滅びて行くのは何ゆえであるか、その理由は自分にはまだよくわからないが、しかし、滅びて行くのは確かな事実らしい。

普通教育を受けた人間には、もはやまっ昼間町中を大きな声を立てて歩くのが気恥ずかしくてできなくなるのか、売り声で自分の存在を知らせるだけで、おとなしく買い手の来るのを受動的に待っているだけでは商売にならない世の中になったのか、あるいはまた行商ということ自身がもう今の時代にふさわしくない経済機関になって来たのか、あるいはそれらの理由が共同作用をしているのか、これはそう簡単な問題ではなさそうである。それはいずれにしても、今のうちにこれらの滅び行く物売りの声を音譜にとるなり蓄音機のレコードにとるなりな

んらかの方法で記録し保存しておいて百年後の民俗学者や好事家こうずかに聞かせてやるのは、天然物や史跡などの保存と同様にかなり有意義な仕事ではないかという気がする。国粹保存の気運の向いて来たらしい今の機会に、内務省だか文部省だか、どこか適当な政府の機関でそういうアルキーヴスを作ってはどうかであろうか。ついそんな空想も思い浮かべられるのである。

(昭和十年五月、文学)

日本文学電子図書館

物売りの声

著 者 寺田寅彦

作成者 宮澤一郎

底 本 寺田寅彦随筆集 第五卷
岩波文庫、岩波書店

昭和42年2月10日 第25刷発行



日本文学電子図書館